暮らしの中の熱帯

その11

アマゾンの薬用植物利用とハーブの流通

早稲田大学人間総合研究センター招聘研究員　戸田美紀

日本人は古来より様々な植物の薬効を活かし生活してきた。1980年代頃より、海外産のハーブが広まり始め、今では、原産国が様々なハーブ茶葉やサプリメントを日本で容易に入手することができる。その中には南米アマゾン原産のものもある。アマゾンに住む人びとの薬用植物の利用を追い、私たちの健康生活に豊富な選択肢を与えてくれるハーブの流通を考える。

薬用植物の宝庫ペルーアマゾン

太平洋側から山脈を越え、東へ下れば、ブラジルに続く広大なアマゾン熱帯林が広がっている。ペルー領内のアマゾンは、国土の半分以上を占める。アマゾン川の源流は、6000メートル級の山々が連なるペルーアンデス山脈にあるとされ、その雪解け水が、世界最大の水量を誇るアマゾン川を生み出している。ペルーは、アンデスがアマゾンに出合う中心であり、地球上で最も高いレベルの生物多様性を育んでいる。

ヨーロッパの文献に最初に現れるペルーアマゾンの植物は、1600年にイエズス会士ベルナベ・コボによって記されたサングレ・デ・グラード（ドラゴンの血の意。*Croton lechleri*）という樹木である。その赤い樹液は傷の治癒に使われるため、マチェテ（刀身の長いナイフ）による切り込みが沢山入ったこの樹木を森林で見ることができる。今では、その創傷治癒の成分が確認され、抗炎症や抗がん作用も示されている。現在、ペルー環境省傘下のペルーアマゾン研究所が作成したデータベースには、1028種の薬用植物が収録されている（IIAP 2010）。

イキトス最大の市場ベレンに薬用植物の店が並ぶ

失われつつある薬用植物の利用

集落の人びとは、健康のために薬用植物を活用しているが、その知識や利用は減少傾向にあるようにみえる。筆者がペルーアマゾン中部の集落で行った薬用植物利用の調査（Toda 2018）では、ほとんどの世帯は、20を超える症状に対して薬用植物を幅広く活用していた。よく使う植物として80種以上があげられたが、ほぼ全世帯が共通して利用していたのは2種に偏っていた。森林から採取するものは少なく、7割を栽培していた。樹液をそのまま、葉を水に浸すなどの容易な利用法が極めて多く、数週間アルコール漬けにしたり、数時間煮出さなければならない樹皮や根の利用は多くない。

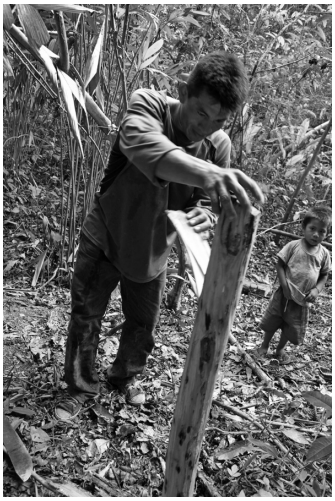
集落の人びとからは、薬用植物への信頼と医療サービスへの期待と不満の不安定な思いが感じ取れる。支払いができずに都市の病院で治療できない人、病院が遠すぎて命を落とす人がいたり、診療所における医薬品不足に不満の声が聞こえたりする。調査においては、原料という理由で、薬用植物の方が医薬品より効能が高いと考える人が半数を超えていた。また、ほとんどが薬用植物の知識の修得を望んでいた。しかし、面白いことに、薬用植物を利用できないことを仮定した場合、それを問題視する人は半数程度しかいなかった。その理由の大半は医療サービスがあるから、ということだった。

ペルーが誇る薬用植物、キャッツクロウ

世界中で人気が高い最も有名な南米産の薬用植物の一つは、ウニャ・デ・ガトと呼ばれる

キャッツクロウ（*Uncaria tomentosa*/*Uncaria guianensis*）である。30メートルを越えて樹冠まで巻き付くこのアカネ科の本木性つる植物は、アマゾンを始めとする中南米の熱帯地域にみられる。キャッツクロウは、先住民によって、様々な症状に活用されてきた。1970年代以降、数多くの研究が、免疫活性、抗炎症、抗がん作用などの60の有効成分を発見している（López et al. 2004）。最新の研究では、認知症と関係するβアミロイドやタウ蛋白を抑制する成分が明らかになっている（Snow et al. 2019）。

有効成分の発見に伴い、キャッツクロウの人気は世界中に広がった。日本でもお茶やハーブサプリメントとして販売されている。世界で流通しているほとんどがペルー産である。ペルーは、1990年代後半に、キャッツクロウの輸出額が3300万米ドルのピークを迎えた。過剰な採取が懸念され、政府も企業も多大な時間と資金をキャッツクロウ栽培の研究に投じた。現在では、一次林、二次林でキャッツクロウを栽培する者もいるが、流通しているほとんどは天然由来のキャッツクロウである（López et al. 2004）。2000年以降、政府は、樹皮や根のままのキャッツクロウの輸出を制限している（Decreto Supremo N° 009/99/AG）。


キャッツクロウの樹皮を剝がす

キャッツクロウを採取して生計の足しにしている人びとも集落にはいる。二次林を小1時間歩いたあたりで採取する。まず、少年が木に登り、そびえ立つ木々に絡まっているつるをマチェテで切り落とす。そして、落とされたつるを、根元に近いところから切り離す。切り落とされた長く太いつるを、1メートルほどの長さに切っていく。すると、子どもたちがいっせいに群がり、切り分けられたつるを木に立てかけ、水を飲む。

キャッツクロウから水を飲む子どもたち

木肌をマチェテで削ってから、樹皮に切り込みを入れて、手で剝ぎ取る。1メートルほどの1本分の樹皮を剝ぐのに1分もかからない。つるが伸びてきて4年目くらいの太さだと樹皮は3辺、5年目だと4辺で採れると言う。収穫した樹皮は、天日干しにして乾かす。その後、最寄りの町の卸業者へ売りに行く。卸業者はキャッツクロウを100キログラムの束にして、首都リマに出荷する。2014年時点で、ある卸業者はキャッツクロウの樹皮1キログラム当たり最高1ソル（当時約35円）で買い上げ、2・8～3ソルでリマに出荷していた。

現地の薬用植物の利用が世界につながる

アマゾンの人びとの薬用植物の利用が、世界中の人びとが受ける恩恵に影響する。キャッツクロウのように世界市場に出たものでなければ、薬用植物は、医療サービスの普及とともに利用自体が縮小傾向にあり、近隣での市場価値は極めて低い。大都市での販売は、経費と市場競争という高いリスクがある。さらに、利用の縮小とともに、有用な薬用植物の知識が失われていく。未だ有用性が検証されていない多くの薬用植物は、市場に出ることなく、次第にその知識も失われていく。日本にいる私たちは、限定されたアマゾンハーブの恵みに触れているのだ。

集落の人びとは、キャッツクロウは無くなる心配はないと言いつつも、年々森の奥に行かないと見つからないとも言う。時間をかけて煎じたキャッツクロウの樹皮は、とても苦いが、苦いほど身体にはいいのだ、と教えてくれた。

引用文献

Instituto de Investigaciones de la Amazonía Peruana. (2010) *Base de datos plantas medicinales*. Iquitos, Perú: Instituto de Investigaciones de la Amazonía Peruana. (IIAP 2010)

López, C., Shanley, P. & Fantini, A. C. (Eds) (2004) *Riches of the forest: Fruits, remedies and handicrafts in Latin America*. Desa Putra, Indonesia, Center for International Forestry Research.

Snow., A. D. Castillo, G. M., Nguyen, B. P., Choi, P. Y., Cummings, J. A., Cam, J. Hu, Q., Lake, T., Pan, W., Kastin, A. J., Kirschner, D. A., Wood, S. G., Rockenstein, E., Masliah, E., Lorimer, S., Tanzi, R. E., & Larsen, L. (2019) The Amazon rain forest plant *Uncaria tomentosa* (cat's claw) and its specific proanthocyanidin constituents are potent inhibitors and reducers of both brain plaques and tangles. *Scientific Reports*, 9, 561. DOI: 10.1038/s41598-019-38645-0

Toda, M. (2018). *Utilization of Medicinal Plants under the Influence of Modern Medicine in Villages near a Secondary City in the Central Peruvian Amazon: An Integrative Approach* (Doctoral Dissertation). University of Tsukuba, Tsukuba, Japan.